

道徳の教科化をどう考えるか

道徳の「教科化」は道徳教育にふさわしくない

道徳の「教科化」は可能か

1958年の学習指導要領改訂で設置された「道徳の時間」が、今後「特別の教科 道徳」に変更されようとしています。これまで教科外に位置づけられていた「道徳の時間」が「教科」になれば、教科書が作成され、子どもたちに対する評価・評定が行われることとなります。この点に関して、多くの人が違和感を持つのではないのでしょうか？

そもそも道徳は「教科」になりうるのでしょうか。国語や数学などの教科には、その内容に関して科学的な正当性があり、それを系統的に提示することができ、しかし道徳を同様に扱うことができるのでしょうか。

「道徳の教科化」に疑問を投げかけると、「道徳を否定するつもりなのか」という声が出てきます。それに対しては、「むしろ逆です。」と言えるのではないのでしょうか。社会を成り立たせる重要な要素として道徳は存在しています。しかしその特性を考えると、むしろ「教科」にしてしまうと、その重要性が子どもたちに伝わらず、実際的な効果という面に着目しても、マイナスになるとしか思えません。よく「道徳の時間の形骸化」と言うことが言われることがあります。クラスでの席替えや係決め等の状況は子どもたちにとって重

大局面であり、気持ちのぶつかり合いの中から、解決の道筋を見出し、自分たちのクラスを作っていくプロセスがあります。まさにこのプロセスこそ道徳的課題と言えるのではないのでしょうか。

また、道徳の時間では「読み物教材」がよく用いられます。その感想を持つ中では、自らの本音よりも、むしろ教師が求める感想を予測する能力が磨かれたりもします。道徳が教科になれば、評価・評定されるのであるから、子どもたちは今まで以上に教師がどう判断するかに敏感になり、「表と裏の使い分け」がエスカレートすることになるのではないのでしょうか。

他の教科であれば、教師の感覚に配慮しなくとも学習することは可能ですが、道徳においてはちがっていると言えるのではないのでしょうか。「本音と建て前」こそが日本における道徳なのだと考えれば、教科化はふさわしいのかもしれないが、これは皮肉としか言いようがないのではないのでしょうか。

歴史的な検証の欠落

道徳の「教科化」に対しての批判として一般的によく指摘されるのは、戦前における教科「修身」の復活になるのではないという点ではないのでしょうか。当時の日本の道徳教育が、「教育ニ関スル勅語」によりお国のために命を捧げることを最重要の道徳的価値とするものだったことの総括の上で「教科化」が議論されているのではないことへの不安です。「教科

化」の議論は、このような教育の歴史認識なしに、危うい基礎の上に立っています。

多くの人の不安は、「教科化」によって、国による特定の愛国心の教育が進むのではないかとといった点にもあります。学習指導要領や改正後の教育基本法、そして学校教育法にも、いわゆる愛国心規定があり、それが教科としての道徳の評価・評定基準の一つになるからです。教科化を議論した中央教育審議会は、「特定の価値観を押しつけたら、主体性をもたず誰かに言われるままに行動するよう指導したりすること」は、道徳教育の使命ではないとしています。

しかし、そのすぐ後に、「これまで受け継がれ、共有されてきたルールやマナー、共同体の中で大切にされてきた様々な道徳的価値などについて(中略)一定の教育計画に基づいて学び、それらを理解し身に付け」ることを道徳教育の内容とし、「社会のルールやマナー、人としてしてはならないことなどについてしっかりと身に付けさせることは必要不可欠である」とも述べています。少なくとも、今日の多文化状況を前提として、価値の内容を吟味しなおさない限り、結果として「押し付け」になってしまいうでしょう。

また、子どもの権利条約で確認されている「意見表明権」が学校の中に位置づけられることも重要です。そうでなければ、子どもたちは教員の言うままに行動するこ

とになってしまいます。それは、道徳教育が目指すべきところではなく、単なる価値観の押しつけになってしまいます。

それでも、「教科化」が重要なとする意見の背景には、「いじめ」問題などへの対策という課題があります。しかし、「仲良くしましよ」とあるいは「ルールを守りましよう」ということを知らないからいじめが起きているのではないのでしょうか。そのような徳目なら、子どもたちはわかっています。規範意識が薄れているから問題が起きているのではなく、学校の今のありようが、子どもたちにいじめにつながるようなストレスを与え続けているのではないのでしょうか。

そのように問題意識を持ち、これまでの教育政策を批判的に分析していかなくてはなりません。それは決して個人の心のありように戻元できる問題ではなく、社会との関わりで考えていかななくてはならないことなのです。



池田 賢市 中央大学文学部教授
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/cnuo/research/20141204.html>
より引用再構成